

熊本で開催された山田眞理子先生による5回の「子育て支援スキルアップセミナー」に続いて、同じく山田眞理子先生と牧野桂一先生による「言語保育技術講習」が北九州で開催され、主任と2人で参加してきました。言葉の遅れにはいろんな原因が考えられますが、それを“訓練”ではなく、保育園で普段関わっている保育者が、より専門的な知識と適切なかかわりを学ぶことで、子どもたちが楽しく、無理なく言葉を獲得していけるように様々なことを学んできました。（「ことばのお風呂」とは講師の牧野先生が使われていた言葉です。）

赤ちゃんが初めて言葉を発し始めた頃のことを思い出してみてください。

赤ちゃんが「マンマン マンマン…」と発した声に、おかあさんは「ママと言った！ ママと言った！」ときっと大喜びしたことでしょう。赤ちゃんはおかあさんと呼ぶつもりで「ママ」と言ったわけではなかったかもしれませんが、なんだかよくわからないけど「ママ(らしいこと)」と声を発したら、大好きなおかあさんが来てくれた、おかあさんが何かしら応えてくれたという経験を何度もすることによって、「ママ」というのはおかあさんのことなんだ、おかあさんが必要なときは「ママ」と言えばいいんだということが分かるようになっていきます。「ママ」とはっきり言うようになっていきます。おとうさんも負けじと「パパは？ パパは？ パパだよ～」と声をかけ、赤ちゃんはおとうさんと呼ぶつもりではなかったかもしれませんが、たまたま「パッパッパッパッ…」と発すると「パパと言った、パパと言った！」とみんなで大喜び。今度は、おばあちゃんも「バアバは？ バアバは？…」と。そうやって、赤ちゃんは「マ」も「パ」も「バ」も口の動きとしては、本当にわずかな違いですが、それを見事に使い分けていくことができるようになっていきます。

このようにして子どもは、なんだかよくわからないけど、口から言葉を発したら、周りのみんなが大喜びしてくれた。こういう声を出すと、みんなが喜んで、自分もなんだか気持ちが良くなるぞ、楽しいな、うれしいなという経験を繰り返し、そのうち少しずつ、発する声には意味があるということもわかり始め、「言葉」として発していくようになるのです。

子どもの言葉を育てるには、子どもとの関わりを楽しみながら、あたたかくて、気持ちのよい「ことばのお風呂」にゆったり浸らせてあげるようなかかわりが大切です。そうすると子どもは言葉を自分のなかにたくさんため込んでいくことができます。お風呂は、湯加減が大切です。命令口調や、怒鳴り声、金切り声などは、冷水または熱湯を浴びせかけるようなものです。ぜひ、心が温かくなるような気持ちの良いお湯(ことば)で満たしてあげてください。

「一つでも多くの言葉を覚えること」が大事なのではなく、「言葉は人と気持ちを共有するため、思いを伝え合うための道具」です。つまり、「この人と気持ちを共有したい！」“この人に自分の気持ちを伝えたい”という思いが言葉を育てるのです。訓練のように言葉だけ教えても、決して言葉は育ちません。「言葉は自分が幸せになるためのツール」なのです。「言葉を獲得することによって、どれだけそれが自分の幸せにつながっているか」が大事なのです。言葉の数の多さとは直接関係ないのです。（言い換えれば、獲得した言葉の数は少なくても、本当に気持ちを共有する人がいてくれたら、大切な人とつながっているという実感を持つことができれば、それほど言葉は必要ないのかもしれませんが。）

言葉を覚えさせることよりも、一緒にいて楽しい、うれしい気持ちになるようなかかわりのほうが大事なのです。まずは子どもにとって「気持ちを共有したい人」になりたいものですね。